

『昭和前期農政経済名著集』

全 22 巻 (1978~81 年刊)

内容概説・巻構成・収録論文一覧

<目 次>

- 刊行の辞「恐慌から戦争の時代を反省する」(近藤康男) 1
- 巻構成 1
- 全集解説「昭和前期の農業基本問題と論争・著作」(阪本楠彦) 3
- 収録論文一覧 5
- 刊行のことば(農文協) 7

【刊行の辞】

「恐慌から戦争への時代を反省する」

東京大学 名誉教授 武蔵大学名誉教授

近藤 康男

昭和初年の大恐慌から太平洋戦争への降り坂は、明治以来の農村収奪の劇しさを加えた時代であった。農業恐慌は、農民を低賃労働者として離村させるメカニズムであり、海外へ侵出する商品の競争力の源泉であったが、国内市場を狭めてソシアル・ダンピングを強制する原因でもあった。

そうした果の太平洋侵略戦争によって、われわれは「古今東西、農業を忘れて商業貿易に立つ国にして亡びざるはなし」の教訓が偽りでないことを学んだ。しかるに戦後三十年、いま進行している高度成長から日本列島改造にみる事態は、大恐慌から戦争への坂と同じ坂を走り下っているのではないか。軌道修正が必要でないか。

あの時期にも反省はあった。ここに選んだものはそういう本である。それらは時の流れに抵抗する力は弱かったかもしれないが、事態の真実を見極めようとしているが故に、若しわれわれが今日の問題を客観的に認識しようとする正しい姿勢でこれに接するなら、多く役立つものをもっている。

私は次のような考えで本を選んだ。

第一、あの思想弾圧の時期に、農業、農村問題を社会科学の、真正面から迫ろうとしたものを広い分野からとること。当時いわれた講座派、労農派などというレッテルは問わないこと。

第二、恐慌から戦争への時期に、具体的課題となった問題をとり上げること。例えば農民離村、米価統制、農家負債、産業組合、小作争議等についての代表的著作。選んだ二十二巻をいかに読むべきかは各巻の解題に任せたい。このシリーズが、現代の問題の正しい認識をえたいとしている人達に何かを与えるに相違ないことを告げて、編者の辞としたい。

【編集委員】

阪本 楠彦（東京大学）

村上 保男（埼玉大学）

梶井 功（東京農工大学）

【巻構成】

第1巻 『農村問題入門』・『窮乏の農村』

猪股津南雄著／大内力解題

農業問題の本質を歴史的発展の中で示した労農派の代表著作。恐慌下の農村の実情も示す。

第2巻 『農業経済論』

近藤康男著／梶井功解題

農業問題は「総資本の拡張再生産に関連して起こる」とし社会科学の立場で分析、論述した著。

第3巻 『日本農業の展開過程』

東畑精一著／土屋圭造解題

日本農業の展開を担当しているものは誰かと設問。論旨明快に説き、新風を呼んだ著作。

第4巻 『農業問題と土地変革』

平野義太郎著／上原信博解題

日本資本主義の根底にある禍根は半封建的土地所有であり、その変革こそ重要であると主張。

第5巻 『日本農業論』

戸田慎太郎著／常盤政治解題

とくに養蚕業など畑作における半封建的諸関係の上に発展する商標的農業の存在を論ずる。

第6巻 『米と繭の経済構造』・『佐賀県農業論』

山田勝次郎他著／阪本楠彦他解題

東北段階、近畿段階、佐賀段階など地域の生産力構造とその性格を解明する著作2点。

第7巻 『日本農業の基礎構造』

栗原百寿著／石渡貞雄解題

わが国農業構造の発展法則は「中農標準化」であることを統計を縦横に活用して主張。

第8巻 『農業土地政策論』

沢村康著／田代隆解題

明治期以降の土地制度を地主的と規定し、内外の土地制度、家族制度などを広く紹介。

第9巻 『日本農村人口論』

渡辺信一著／小林謙一解題

明治期以降、昭和恐慌に至るまでの農家経済と労働市場との結びつきを理論的に解明。

第10巻 『農民離村の実証的研究』

野尻重雄著／久保田義喜解題

農民離村が著しくなった戦時期、1万戸の農家からの聞き取り調査による実態報告書。

点となった課題を実態から発言。

第 11 卷 『農業生産の基本問題』

川俣浩太郎著／村上保男解題

『日本農業の再編成』

桜井武雄著／川俣英一解題

日本農業における労働組織、計画生産、生産力形成を解明し、農業構造の姿を分析する。

第 12 卷 『米穀流通費用の研究』

木村和三郎著／持田恵三解題

公定米価算定の基礎となる流通費用につき科学的にメスを入れた最初の書。昭和 11 年の著作。

第 13 卷 『日本産業組合論』

井上晴丸著／臼井晋解題

協同組合の日本的特質を具体的な事実の解明により行い、農協の基本的なあり方を問う。

第 14 卷 『農業金融論』

小平権一著／加藤譲解題

わが国農業政策における金融のあり方について各国、各県制度との比較から集大成した著作。

第 15 卷 『農家負債と其整理』

河田嗣郎・碓正夫著／南清彦解題

農家負債は農業恐慌から引きついだ重要な社会問題。著者らはその実例から深く検討する。

第 16 卷 『農業生産費論考』・『農業簿記原理』

大槻正男著／柏祐賢解題

生産者米価を生産費の規定を論じ、農家の経営改善のための簿記原理を具体的に述べる。

第 17 卷 『日本農業の機械化』

吉岡金市著／吉岡金市解題

岡山県興除村などの実践の中で農業機械化の可能性を発見し論じあげた農業機械化の古典。

第 18 卷 『農業経済地理』

青鹿四郎著／錦織英夫解題

農業には経済的、自然的条件によって一定の地理的秩序があることを日本風土の中で解明。

第 19 卷 『畜産経済地理』

宮坂梧朗著／桜井豊解題

明治以来の畜産政策の歴史をふまえつつ、畜産の地理的配置を具体的に追求した労作。

第 20 卷 『農村社会の研究』

有賀喜左衛門著／米地実解題

名子の賦役の徹底的研究。封建論争の時代、その一焦

第 21 卷 『入会権論』

奈良正路著／宇佐美繁解題

入会地が、官や村内地主や植林政策により侵害されることに怒りを込めて著した良心の書。

第 22 卷 『農民闘争の戦術、その躍進』大西俊夫著

『農民組合入門』大西俊夫著

『日本に於ける農村問題』稻村隆一著

大島清解題

第一次世界大戦後、日本農民運動の初期から恐慌、弾圧の歴史をふまえて改革の方向を論じる。

【全集解説】

昭和前期の農業基本問題と論争・著作

東京大学教授 編集委員 阪本楠彦

二つの世界大戦の間、モスクワで発行されていた「世界経済旬報」が株屋さん仲間でも重宝がられたという話がある。資本主義の否定的側面がどっとふき出した感じの時代で、戦争がなければ恐慌になるしかないという予言が、不思議なほど当たりつづけたものだ。

第二次大戦後もまたきつとそうになると、多くの人々が思ったほどである。案に相違して 1950~60 年代は「強気が勝つ」一応の黄金時代がつづいたけれど、それはやがて、インフレ政策なしには恐慌になるほかないという時代に転換してきている。戦前をふりかえてみることの意義が、ようやく大きくなってきたようである。

米・農村の疲弊をめぐって

米過剰の問題があった。大正末期以来さがり気味だった米価は、昭和 5 年に 8 月の石当たり 30 円 53 銭（深川正米市場）から 11 月の 18 円 13 銭へと暴落した。米騒動（大正 7 年）以来、日本政府が朝鮮や台湾における米の増産に取組み、その効果が出たことと、世界恐慌の到来とがかさなりあったためである。集約的な日本農業には活路がないかのようにいわれた。小作農を搾取している地主でさえが、ブルジョアなみのぜいたくはできなくなったという意味での苦境に直面した。

農家の次三男坊は都市で失業し、帰るあてもない。ロンペンという言葉が日本語として定着した。

「農村の疲弊を救う」という超階級的な言葉のもとで「救農国会」がひらかれた。そして政府が米価に手をつけはじめたこと、ムラを主体とする経済更生運動を提唱し予算をつけたことは、農政史上でも大きな意味をもっている。

米の投機を楽しむ連中の力もまだかなりあり、自由主義的な経済思想がまだ強くて、サッパリききめのない間接統制方式が発足したにすぎぬ。とはいえ、激しい非難のなかで行政の経験も蓄積されてゆく。大槻正男の『農業生産費論考』や、木村和郎の『米穀流通費用の研究』などが、その代表的な産物であり、昭和十五年にはじまる米の直接統制も、その延長線上にこそ位置づけられるだろう。

経済更生運動が解決すべき重要課題だった農家負債については、農林官僚の一人、小平権一が『農業金融論』にうん蓄を傾けた。政策がどんな結果になったかは、河田嗣郎と裕正夫の『農家負債と其整理』がよい参考になる。

この間、地主は政治の面でも主導性を失い、ただ自分の利害を守るのに汲々としているだけだった。地主制度はそれが小作農をひどく搾取しているためだけではなく、

時代の動きを追っかける存在になりはたてたということのためにも、弾劾されるようになってきた。政府という「危険を負担することない“企業者”」こそが農村を動かす者になったと、東畑精一が『日本農業の展開過程』に書いたのも、そのせいである。地主制の始末のしかたを念頭におきながら、沢村康は『農業土地政策論』を書いた。

燃えあがった封建論争

左翼の陣営では封建論争が燃えあがった。そもそもは日本の政治を考えるについて、かねてからある天皇制の反動性をこそ重要視すべきか、それともこれからうまれるだろうファシズムの危険性のほうを重要視すべきかの論争だったようである。それが農業の部面では、地主制を封建的と規定するかどうかの論争として展開されることとなった。

地主制は時代おくれのものであるが故に、なおさら狂暴な存在となるだろうし、したがって人民の主要な敵となるという見解のほうに講座派であり、時代おくれの地主制を主要敵とみなすことはやめて資本主義に攻撃を集中すべきだという見解のほうに労農派である。

講座派の場合、日本資本主義の特殊な野蛮さを憎むのあまり、英米の近代的な資本主義を美化するくらいがあったことは否めない。けれども山田盛太郎、平野義太郎氏らが明治の天皇制の構造の「型」を明確にした業績は不朽であろう。ただ「型」のとらえかたが硬直的にすぎたことを、惜しまれるだけである。

その欠点を労農派はついていた。猪俣津南雄『農村問題入門』、櫛田民蔵の『農業問題』などである。しかしたとえば、土地取上げや土地立入禁止などという地主の抗争手段をブルジョア的な所有権の発動にすぎぬと説明をおえてしまうあたり、近代的土地所有についての理解は今より浅かったのが惜しまれる。

論争のなかから、封建的農村の資本主義的進化をみとめる「新講座派」が生まれ、戸田慎太郎は『日本農業論』を書いた。労農派の稲村隆一は『日本に於ける農村問題』を著す。どの派にも属さない学者にしても、封建論争の成行きは念頭にあったと思う。有賀喜左衛門の『農村社会の研究』は、講座派が封建制の証拠だとした岩手県山間部の名子（なご）制度を舞台とするものである。近藤康男の『農業経済論』にしても、農業の「資本主義化」を、資本家的農業経営がうまれたかどうかに見るのではなく、農業が一国の資本主義体制のなかにいかに組み入れられるようになったかを見るべきだと主張したものだ。

昭和 10 年代—過剰人口・産業組合・機械化

経済の戦時体制化がすすんだ昭和 10 年代には、三つの注目すべき現象があらわれた。

第一は、よくいえば「日本民族の苗代」であり、正直にいえば過剰人口のプールである農村から、人口の流出が目立ってきたことである。第二次大戦後も 10 数年間

は「次三男をどこへ棄てるか」が議論になったものだが、その棄て場が、昭和10年代は侵略戦争の準備のなかに見つけられはじめていたのだ。渡辺信一が既存の資料を整理して『日本農村人口論』を書いたし、野尻重雄は実態調査を通して『農民離村の実証的研究』を書いた。

第二に産業組合（いまの農協の前身）の組織拡大がある。あいつぐ大弾圧のために農民運動が潰滅に瀕していたという事情と、頭の古い肥料商人どもが産業組合反対運動を呼号していたという事情とがあって、産業組合運動自身に、あたらしい社会をつくる力があるのではないかという幻想がうまれはじめていた。その幻想に挑戦したのが近藤康男の『協同組合原論』であるが、それではまだなまぬるいとして井上晴丸（立田信夫）は『日本産業組合論』を書いた。

第三に指摘されるのは、あたらしい生産力の胎動である。日本でも農業の機械化が、もはや加工過程だけでなく、耕耘過程をもとらえはじめていることを吉岡金市が『日本農業の機械化』に書いた。今にして思えば、アホみたいな当たり前の話だが、それが当時では革命的な主張だった。

古い農本主義者にとっては機械化とは粗放化のことにほかならず、収量は必ず減り、しかも農村から勤勉の「美風」は消えさってしまうだろうことをおそれる。耕耘機がまだ浅耕しかできぬ点を彼らはあげつらう。他方で急進的な左派は「農業危機」を革命で克服しない限り生産力の発展はありえぬと信じこんでいて、耕耘機のちっぽけさを嘲笑する。吉岡の指摘する事実を、両派ともに岡山平野南部干拓地の特殊事情として片づけてしまうような状況だった。

適正規模論・生産力論など

その頃、「満州」移民問題などもからみ、適正規模農家——戦後の農業基本法という自立経営の元祖だ——をめぐる論議がさかんになってきたせいもあって、生産力に視点をあわせた論文が、次々に発表されるようになっていく。田中定の『佐賀県農業論』は小論ながらその代表的なものであり、「自小作前進」型の生産力担当層の存在が立証された。

さらに山田勝次郎は『米と繭の経済構造』において、佐賀県農業が土地生産力と労働生産力の併進という特徴をもち、かつて山田盛太郎が「近畿型」農村の典型とした奈良県農業とはちがった新しいものであることを示した。

栗原百寿は官庁統計を駆使した『日本農業の基礎構造』で、「農業危機」のもとで農民層が「全面的崩落」しているわけでは決してなく、むしろ中農標準化傾向にあることを指摘した。

根づいた「社会科学」

古い地主豪農型の経営が崩落したかわりに、あたらし

い芽が出ていたわけなのである。

ヨーロッパから輸入された社会科学は日本の土に根をおろした。青鹿四郎の『農業経済地理』や宮坂梧朗の『畜産経済地理』など、その一つである。また昭和農業恐慌を背景として出た奈良正路の『入会権論』は、後の戒能通孝の「入会の研究」とともに、日本の土壌が生み出した業績である。特筆されてよいと思う。

暗黒の時代に、明日の光明を信じて仕事をしつづけている人々があったのだ。若くして戦死した川俣浩太郎の『農業生産の基本問題』もその一つとして、あげることができると思う。

小野武夫や黒正巖らが、江戸時代の農民暴動をほりおこした業績の意味についても触れるべきところだが、農業史に関するものはすべてこの名著集から除外することにしたので、この小文でも省略したい。ただ、農民運動のすぐれた指導者であり戦後まもなく死んだ大西俊夫の昭和初期の著作『農民闘争の戦術、その躍進』などを読むにつけ、いまさらながら「農地改革は一日にして成らず」だと、つくづく思うことを書きしるすにとどめたい。

【収録論文一覧】

第1巻 農村問題入門・他

78.09 A5 444頁 5,000円 4-5410-78030-1

「農村問題入門」

猪俣津南雄著 解題 大内力

農村問題の本質を歴史的発展のなかで理解し、そこから日本農業の特質を明快に分析した書。いわゆる労農派の農業理論の典型を示す。著者は問題の解決を「まず農業生産力の増大をすすめることで、社会的諸前提が与えられれば、機械はアジア的稲作労働の最悪の部分をも克服する」と方向を示している。

「窮乏の農村」

猪俣津南雄著 解題 大内力

昭和農業恐慌下の全国農山漁村をくまなく歩いて記述した理論的ルポルタージュ。著者はそれを「尋常一様でない」と総括している。農政のひずみが具体的に農業にもたらす諸問題の指摘は、「窮乏のさまざまな型」とともに現代に多くの示唆を与えている。窮乏の程度が村ごとに自小作兼業の条件ごとにちがう点も見事に表現する。

第2巻 農業経済論

81.09 A5 344頁 3,090円 4-540-81034-0

「農業経済論」

近藤康男著 解題 梶井 功

農業問題を社会科学の一分野として位置づけた著者による農業経済学の方法論とそれにもとづいた体系を示す。農業問題は経済的には、総資本の拡張再生産によっておこる問題であるという認識の上に立っている。剰余値の生産も実現も、本来資本主義の内部にあるが、非資本主義的外围である農業問題をみよとする。

第3巻 日本農業の展開過程

78.12 A5 360頁 3,090円 4-540-78051-4

「日本農業の展開過程」

東畑精一著 解題 土屋圭造

東畑教授は、日本農業の展開を担当しているのは誰かと設問し、農民は商品社会に適応する訓練をえる機会に乏しく単なる業主にすぎず、地主も小作料減収の危険を分胆した頃の機能を失った。政府のみが補助金や低利資金によって「危険を負担せざる企業者である」と説き、鋭い事実認識で農業経済学に新風をまき起こした。

第4巻 農業問題と土地変革

79.05 A5 470頁 4,200円 4-540-79001-3

「農業問題と土地変革」

平野義太郎著 解題 上原信博

講座派論客の著者による昭和10年前後の土地問題を中心とした論文集。恐慌以後の侵略戦争への傾斜時代を背景に、古典にたずね、中国をはじめとする諸外国に学び、日本農業を深く分析、「日本農民は今こそ民主民族革命の課題を自己の課題とせよ」とし、人民民主的農地改革への期待と重要性を表明している。

第5巻 日本農業論

80.07 A5 328頁 3,090円 4-540-80019-1

「日本農業論」

戸田慎太郎著 解題 常盤政治

いわゆる封建論争をめぐる一著作。著者は、明治維新後の農民を単純生産者あるいは小ブル生産者とみる労農派ではなく、どちらかといえば半封建性を強調する講座派の見解であるが、形而上学的論争から脱却して、問題を具体的条件指摘の方向へ前進させるため養蚕業など畑作における商業的農業を具体的

に検討している。

第6巻 米と繭の経済構造・他

78.10 A5 352頁 3,090円 4-540-78033-6

「米と繭の経済構造」

山田勝次郎著 解題 阪本楠彦

いわゆる講座派の農業理論は、日本の零細農は半封建的小作関係を背負っており、生産力と生産関係とが互いに刺激し合って「東北段階」「近畿段階」という二つの発展形態をあらわしたというのであった。本書は米と繭とを分析対象に、府県別統計を年代的に整理して、この認識をさらに細密化したものである。

「佐賀県農業論」

田中定著 解題 都留大治郎

戦前、「佐賀段階」と名づけられたより高い生産力水準は何によってもたらされたか。地代論争、農民層分解論をふまえ、佐賀県下平坦部の水田地帯を克明に調査し、耕作農民のもつエネルギーから自小作前進説、佐賀段階の生産力の裏づけをした論文。本書の他に「佐賀県平坦地帯一農村の分析」も収録する。

第7巻 日本農業の基礎構造

79.07 A5 440頁 5,600円 4-540-79013-7

「日本農業の基礎構造」

栗原百寿著 解題 石渡貞雄

わが国の農業構造は特殊ではあるが、そこには一般的な発展法則が貫かれている。それは中農標準化であると、統計を駆使して示したのが本書である。大正以後の発展を検討すると両極分解でなく中農標準化が法則であるとする。農林統計の総合解説書であり、農業の統計的研究のみごとな入門書ともなっている。

第8巻 農業土地政策論

79.49 A5 490頁 4,120円 4-540-79027-7

「農業土地政策論」

沢村康著 解題 田代隆

土地私有と契約自由の系列の上に立った明治の土地制度を「地主的」土地制度と規定した著者による土地政策についての体系的叙述。当時、立法に難航した小作法、その代案として実施された自作農創設事業、また、内外の植民政策、世襲農場法、家産制度など詳細に記し、資本主義的土地国有論から社会主義的国有論も解説。

第9巻 日本農村人口論

80.03 A5 468頁 4,120円 4-540-79090-0

「日本農村人口論」

昭和恐慌のとき、「失業者の帰還」に関心をもった著者は、日中戦争にさしかかるとき、いわゆる農村労力の不足の意味を考えたという。しかし、主流は農業労働力の賃労働者化の方向で、本書では明治前後期、第一次世界大戦を経て昭和経済恐慌までの間の農家経済と労働市場との結びつきを論理的かつ実証的に考察する。

第10巻 農民離村の実証的研究

78.11 A5 544頁 4,120円 4-540-78044-1

「農民離村の実証的研究」

野尻重雄著 解題 久保田義喜

戦時産業の急速な拡充で農民離村が著しくなった昭和10年代、離村の量を国勢調査資料だけで把握するだけでは満足せず、人口移動と農家経済との内的関係を認識する目的で行なった全国一万戸の農家の聞き取り調査の報告書。常識的な概念が客観データで裏打ちされ、あるいは拒否される。人口問題研究に光彩を放つ名著。

第11巻 農業生産の基本問題・他

80.09 A5 456頁 4,120円 4-540-80027-2

「日本農業の再編成」

桜井武雄著 解題 川保英一

戦争下の経済はすべてにわたって平和時と異なる。農業も例外でない。本書は広い意味での生産力理論によって思想を展開し、変革への展望を招こうとした代表的論著。「今の現実と与えられた条件」のもとで日本農業のいかなる再編成が可能であるかに回答を与えた。

「農業生産の基本問題」

川俣浩太郎著 解題 村上保男

戦争は若い研究者川俣浩太郎を研究からひき離して戦死させた。あとに戦時体制下の生産計画、労働組織化、生産力形成、人口移動等を考察した本書が遺った。戦時経済下の日本資本主義の変貌、これに対応する農業労働力の量的・質的变化と農業経営の諸問題を考察対象としている。

第12巻 米穀流通費用の研究

80.11 A5 324頁 3,605円 4-540-80036-1

「米穀流通費用の研究」

木村和三郎著 解題 持田恵二

本書が著された昭和11年は、商品流通に対する国家的統制が準戦時的に強化された時代である。著者は、公定米価算定のひとつになる流通費用の扱いは常識では不可とし、「流通費用のうち価格形成上の単なる空費と然らざるものを区別せよ」と科学的立場を守ることを強調している。米価格形成に関する貴重な労作。

第13巻 日本産業組合論

81.05 A5 288頁 3,090円 4-540-81012-X

立田信夫(井上晴丸)著 解題 臼井晋

「日本産業組合論」

立田信夫は、当時農林省にいた井上晴丸のペンネーム。著者は序言で、これは近藤康男「協同組合論」で手薄に残されている協同組合の日本の本質の闡明を具体的な事実の分析によって行ない、遡って右の書に混入されている修正主義的方法・理論を批判したい」とする。その的が貴かれ今日の巨大農協に訴えるものも大きい。

第14巻 農業金融論

81.07 A5 982頁 6,180円 4-540-81012-X

「農業金融論」

小平権一著 解題 加藤譲

系統信用の整備を目標に各国の制度を調べ、日本の事情と比較検討した研究の集大成が本書である。高橋是清が「産組中央金庫設立は、日銀、農工、勸銀の銀行組織を乱すから反対」といったとき小平が「相互組織の頼母子講のようなもの」とトボけたのも、本書で示される膨大な研究蓄積があつてのことである。

第15巻 農家負債と其整理

79.01 A5 404頁 3,605円 4-540-78058-1

「農家負債と其整理」

河田嗣郎・俗正夫著 解題 南清彦

農家負債整理は、農業恐慌の時代から戦時中まで引き継いだ重要課題で、対策として農林省の負債整理組合や系統資金の融資に対する損失補償制度があつた。河田・俗両氏は問題に真正面から取組み、多数の実例を検討して「問題は生産方式と土地所有にある。共同経営化の要がある」との基本的認識に達している。

第16巻 農業生産費論考・他

79.02 A5 304頁 3,090円 4-540-79021-8

「農業生産費論考」

戦前の食糧時代、生産者米価の基準は生産費だったから、その調査方法や評価などが問題となっていた。すでに昭和9年の米穀統制法が調節米価の最高と最低とを決めたとき、最低は生産費を基準にしたから多く論議が出た。それを背景にして生まれたのが本書で、基底に日本農業の風土観があり、単なる数学論ではない。

「農業簿記原理」

大概正男著 解題 柏祐賢

著者のいわゆる「京大式簿記」の原理を述べている。この簿記は、上からの農家経済用簿記でなく、農民が自らの経営を改善するための自己監査機能のあるもので戦前から現代に至るまで実際に記帳されつづけ、現場で親しまれている。独自の理論を開拓した農業経営学者大概正男による農業簿記原理の決定版である。

第17巻 日本農業の機械化

79.02 A5 296頁 3,090円 4-540-78062-X

「日本農業の機械化」

吉岡金市著 解題 吉岡金市

戦争への時期、農業労働力は逼迫し、農業機械化の必要性は早くから言われても、その可能性については疑念をもたれていた。その時代に岡山県興除村などの実践のなかから「可能性」を発見し、高らかに世に呼びかけたのが当時労働科学研究所にいた吉岡金市である。社会科学の視点から機械化を扱ったわが国最初の著作。

18 農業経済地理

80.01 A5 436頁 4,120円 4-540-79087-0

「農業経済地理」

青鹿四郎著 解題 錦織英夫

本書刊行の昭和10年当時は、帝国農会が野菜の販売斡旋事業で出荷期の府県間協定をしていた。同会にあつた著者による「東京市を中心とする農業地域」の研究発表は、チウネンが「孤立国」で追究した法則性を見事に示した。本書はそのまとめで、経済的自然的条件によって異なる農業の秩序、地域性を解明している。

19 畜産経済地理

80.05 A5 416頁 4,120円 4-540-80003-5

「畜産経済地理」

宮坂梧朗著 解題 桜井豊

明治以来の畜産政策の歴史をふまえつつ、畜産の地理的配置を理解しようとした野心的な労作。明治政府の士族授産である牧畜から展開した軍馬政策の空しい結末、牛や鶏にみる業者、商業資本と農民との間の特約関係から農民経済を産業資本として成長させ得なかつた事態を鋭い眼で分析する。畜産経済学確立の書。

第20巻 農村社会の研究

81.01 A5判 532頁 4,120円 4-540-80049-3

「農村社会の研究」

有賀喜左衛門著 解題 米地実

名子の賦役の徹底的研究である。賦役とは何か、学界では封建論争の一点となった問題である。著者はこの慣行の本質を、あらゆる系譜の名子の実態を愛情こめて調べあげることによって把握しようと試みる。土地制度、小作制度の研究にはもとより、農村社会学の確立に大いに貢献した基本的な著作である。

第21巻 入会権論

81.03 A5 336頁 3,090円 4-5413-80053-1

「入会権論」

林野入会は、旧藩時代に広く行なわれ、稲のための刈敷や家畜の糞は多くここで得ていて、金肥のない時代の農業生産力の一部であった。その入会が、官により村内地主により、あるいは植林のために侵害されたが、入会権の研究者の態度がほとんど無産階級と対立しているのを見て奮起して著した日本の良心の産物。

第22巻 農民闘争の戦術、その躍進・他

79.11 A5 416頁 3,605円 4-540-80053-1

「農民闘争の戦術、その躍進」

大西俊夫著 解題 大島清

昭和3年刊。農民運動の昂揚期を背景に戦術の進展を声高くうたい、現実をまともにみて澁刺と主張した書。明治期以降、とくに小作争議でのエネルギー、日本農民組合の誕生、工場労働者の団結、対する地主と政府の逆襲、農民戦線の分裂などの歴史と美態に即していかなる戦術で闘うべきかを論じる。

「農民組合入門」

大西俊夫著 解題 大島清

著者が日本農民組合常任中央執行委員当時、長い運動の経験をふりかえり、戦後の農民運動と農民組合のあり方について静かに語った書。第一次大戦後、日本農民組合運動の初期から、農業恐慌、侵略戦争の時期の弾止、圧殺をくぐりぬけ、具体的な運動にかかわってきた著者でなければ語れない歴史と展望が記述される。

「日本に於ける農村問題」

稲村隆一著 解題 大島清

きびしい農民運動実践家が、日本農村経済の発展方向を求め、農民に力の自覚を促し勇気を与えた書。土地問題を中心に論を展開する。まず割地制度の特質と改革の方向を論じ、明治維新の封建的大土地所有制の廃止、農奴制の遺物を死滅せしめた意義を語る。そして日本農業における資本主義的発達と改革の方向を示す。

※ ※ ※ ※ ※

注) 各巻に記載されている発行年月、版型、頁数、定価、ISBNコードは冊子版のもの。

【刊行のことは】

社団法人 農山漁村文化協会

1926年にはじまり45年におわった昭和前期(いわゆる戦前)は、恐慌と戦争・動乱に終始した。この時期の農村・農業問題は全知識人共通の関心事であり、政治変革と国民経済を左右する根源となっていた。

それだけに日本資本主義論争ははなばなしなく、野蛮な弾圧にも屈せず数々の名著を生みだした。また農民運動・労働運動もその影響を強く受け各派に分かれて対立した。これらの論争や運動が、戦後民主化運動のなかで一時に花咲いた。しかしまもなく経済の高度成長の波にのみこまれ衰退してしまった。そして今、高度経済成長の挫折と慢性的不況の中でようやく反省が生まれ、人間の根源を求めて、再び農村・農業問題がクローズアップされてきた。

わたくしどもが『明治大正農政経済名著集』に続いて『昭和前期農政経済名著集』を刊行する理由も、この時期にこそ改めて先人の苦闘と、その中でうちたてた偉業とを学びとりたいからである。

明治大正名著集に続いて昭和名著集も編集の責任を近藤康男博士にお願いした。先生は精力的に実質的な編集の仕事をすすめられ、後進のため熱情をこめて内容見本の各巻解説まで御自身でお書きになられた。感謝のほかはない。

ここに戦前の農政経済学の到達点を示すに足る集大成が行なわれることによって現実の農村・農業問題に対する研究が一步前進する一助となることを期待してやまない。

昭和52年10月